

原野の子らと

鶴澤希伊子

原野の子らと

鶴澤希伊子

— 僻地教師の人間記録 —

1964年7月 初版発行

著 者 の 了
解 に よ り
検 印 廃 止

原野の子らと

430yen

著者 © ^{うざわきいこ} 鵜澤希伊子 神奈川県川崎市長尾神木1,609
(鈴木巳三郎方)

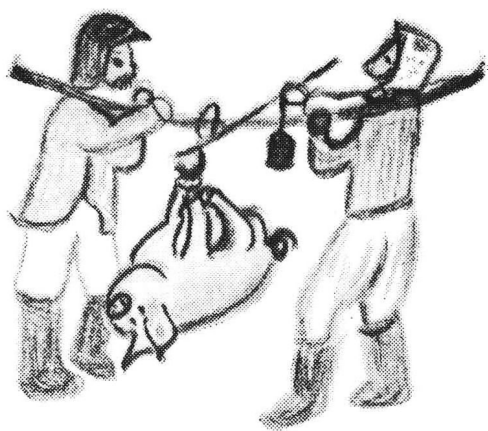
印刷者 川上胖 東京都板橋区志村町 1-1

印刷所 東洋印刷株式会社 東京都板橋区志村町 1-1

発行者 福村保 東京都文京区真砂町36

発行所 株式会社福村書店 東京都文京区真砂町36

Tel. 小石川 (811) 0660 振替口座東京78313



豚を売る

key

序…東京大学 高橋 三郎
序…恵泉女学園 乾 節

鵜澤希伊子 著

序

高橋 三郎

鵜沢希伊子^{うざわきいこ}さんを、私をはじめて知ったのは、昭和二十三年四月から、非常勤講師として恵泉女学園高等部につとめるようになった時のことであった。あの頃鵜沢さんは、二年生であつたように記憶する。眼鏡をかけた、ほっそりとした、どことなく弱々しい感じのする生徒だつた。特に鮮明な印象を与える人ではなかつたが、一年間教室で一緒に過しただけで、次の年の春には、音もなく姿を消してしまつた。あとでクラスメートたちから、お母さんが急病のため、いそいで北海道に旅立ち、学校は中途退学しなければならなくなつた、という事情を聞いた。ああ気の毒に、あのひよわい身体で、北海道での烈しい生活に耐えられるだろうか、と思わずにはいらなかつた。

鵜沢さんとの交わりは、こうして、おそらくはほんの通りすがりに相識つた教え子の一人として、間もなく私の記憶からは、消え去つたかも知れないのである。それほど、さりげなく顔を合わせた仲に過ぎなかつた。ところが、北海道に去つてからも、彼女との文通は、断続しながらも、不思議に長く続いた。ひとつに

は、恵泉女学園の学友たちが、北へ去った不遇な友をいつまでも覚えて、何とか力になりたいと願いつづけていたので、断続的にも様子は伝え聞く機会があったし、時々貰う個人的な便りは、深い印象を私の心に刻み込んだからである。北海道での鵜沢さんの生活は、小さな一つの生命が、恐ろしい外界の圧力の下に喘ぎながら、何とかして生き抜こうとした、文字通り血みどろな戦いの連続であった。『生命』のこの必死の抵抗を、何とかして助けなければという思いが、私の心にもあった。そしてまた、余裕のない、ぎりぎり一杯の生活をしているにもかかわらず、思わず吹き出さずにはいられないようなユーモアや、しみじみと自然の美しさに見とれている鵜沢さんの心のうるおいに触れて、私にとっても、とだえがちなこの文通は、まことに貴重な意味を持ち続けたのである。

あの頃から、早くも十三年の歳月が流れ、一昨年（一九六二年）の四月に、鵜沢さんは、以前とは見違えるようにたくましくなつて、帰つて来た。それと同時に、この御一家の方々も、みんな北海道を後にし、ひさびさに内地の生活を楽しむことになった。楽しむとはいっても、いろいろな意味において、なお多くの困難との戦いが待ちかまえてはいたが、今までの苦闘にくらべれば、まるで夢のような思いのする生活環境であつたに違いない。かくて、鵜沢さんの生活にとつて、烈しい試練の一頁は終りを告げた。しかし、今までの戦いの跡を、あのまま闇の中に葬り去るのは、あまりにも惜しいと私は思った。ただ単に、僻地で働いた一女教師の生活体験というだけのことでなく、学校教育というものが、どう

いう機構の下にゆがめられているのか、また開拓農民の生活が、いかに悲惨な実情にあるかというような、公の意味を持つ諸問題を、鵜沢さんの眼は鋭く捉え、彼女なりにこれを解こうとして、苦しみ続けて来たことを、私は知っていたからである。私は手はじめに、東京独立新聞誌上に、僻地教育の問題点について、寄稿することをすすめた。後には、どうしても一つの単行本として、長い間の記録を出版したいと願うようになった。この企ては、さまざまな障害に遭って、何度か押し流されようとしたが、思いもかけず福村書店社長の好意ある御助力を得て、ついに実現のはこびに至ったことは、本当に感謝にたえない。

本書の内容については、本文それ自身が、何よりも雄弁に語っているから、余計な駄弁をつけ加える必要はないと思うけれども、ほんの少しばかり、私の眼に映った問題の所在を、指摘しておきたいと思う。

鵜沢さんの苦悩は、みずから『序文』の中に述べているように、戦争の残した無数の爪跡の一つであった。戦後すでに、二十年に近い年月がたって、多くの人が、悪夢のような狂乱の年月を、すっかり忘れ去ろうとしているとき、今もなお、かつての鵜沢さんと同じように、生活の重荷の下で、へとへとになって喘ぎ続けている人々のあること、しかもその中には、戦争の故にこそ、この苦悩の中に投げ込まれた人々があるということを知るのは、我々の心の中に、歴史の審判の厳粛さを、深く刻み込まずにはやまない。

第二に、ここに取り上げられているのは、農村の後進性にまつわる諸問題であ

るといふ点においても、本書は、日本の社会の持つ最も深刻な病患に、我々の注意を向けてくれる。鶴沢さんの選んだ解決は、この泥沼のような救いなき社会から、ひとたびは脱出し、自分を守り育てて行くことによって、間接的に、農村の覚醒を呼びかけよう、という道であつた。そしてまた、この凄惨とも言ふべき現実のきびしさを知るとき、かよい一女性としては、これ以外に道がなかったであらうことを、我々も深い同情をもつて理解せずにはいられない。

しかしながら、農村に新しい未来が開かれる為には、最後まで（しかも喜びをもつて）農業を守り、内側から新しい社会を建設しようとする人々の、たくましい努力が、どうしても必要であることは、多くを語るまでもなく明らかである。鶴沢さんは、この記録を通して、自分にはできなかったこの大事業を、いわば間接的に指し示しつつ、新しいその担い手の出現を待っているのだ、とも言えよう。そしてこれは、もはや単なる個々の単独者としてではなく、志を同じくする人々の、しかも自分一個の利益の為ではなく、多くの悩める同胞の苦しみを解決する為に、共に力を捧げあつて行こうと願う人々の、緊密な協力の上にのみ成り立ち得る事業である。この領域に関して、私は多くを語る資格を持たないが、ただ一つだけ、小谷純一氏によって創始された、全国受農会の存在が、戦後十九年の歩みを通して、一つの力強い推進力となりつつある事実を、ここに指摘しておきたい。

しかしながら、本書の中心を成す価値ある内容は、むしろひとりの教師とし

て、不遇な環境にある教え子たちを、何とか守り抜こうとして悩み続けた者の、素朴な記録の中に見出される。鵜沢さんは、見栄を張ることが大嫌いな人である。この記録にも、一切の虚飾をかなぐりすてて、自分らしく生きたいのだという、悲鳴にも似た、ありのままの、思いつめた願いが、叩きつけるように吐露されている。生きたい。どん底にある人間にとって、息も絶え絶えな中から言えることは、これだけであった。そして、生きるということは、忠実に自己を守るということであつた。一見徹底的に自己中心的に見える、この生き方から、実は本当に温かく幼い魂を見守り、人を心の底から愛し抜こうとする、深い愛がたくましくして流露して来るさまを、読者は驚きをもって見られるであらう。鵜沢さん自身は、みづから意識していないけれども、おそらくはシュヴァイツァー博士の言われる『生への畏敬』という思想にも似たものを、言わず語らずのうちに、ここに表明しているのではあるまいか。一言にして尽くすならば、これは、人間の生命をあるがままにいとほしみ、育て抜こうとする『ヒューマニズム』の精神なのだ。

私はこの純粹かつ真摯な人生探求の態度を、こよなく尊く思う。しかし同時に、これだけでは、最後の解決にはならないのだということも、ここにはっきり表明しておかねばならない。そして鵜沢さん自身も、本書の結末の部分に、そのことを、暗黙のうちに語っているように思う。それでは、その最後の人生問題の解決とは、どこにあるのか。それを私は、言葉をもつて語ることをすまい。鵜

沢さん自身も、新しい探求の門出に立っていると語っているのだ。読者もまた、それぞれの立場において、自分の生活を新しく歩み始めるべきであろう。本書の出版が、かくて、驚くべき事実を人々に伝える機会になると同時に、新しい建設に向って、ひとりびとりの魂を揺り動かす機縁としても役立ち得るならば、私共の願いは満たされるのである。

(国際キリスト教大学・東京大学講師)

一九六四年一月

序

乾 節

鵜沢希伊子さんは、恵泉女学園普通部十五回、すなわち戦後、新制度による高等学校の二年生、そしてこれは希伊子さんにとって普通教育最後の年でもある学年の時、私のうけもった生徒の一人でした。

ただ独り、北海道の開拓村から上京し、よそのお宅に家事を手伝いながらの通学は、それだけでもどんなにか苦勞の多い事なのに、学校での希伊子さんは他の同級生と少しも変わりませんでした。控えめな内輪なもの言い、柔和な中に責任感の強い、真面目な、もの静かな行動、全く後年の不撓不屈ともいえる、あの意志の強さ、歯をくいしばって深い悲愁感、寂莫感に耐えたその面影はまだ覗うよすがもなかった希伊子さんでした。

月に一回の聖書輪読と祈禱会を積極的に持つようになっていたこの学年は、当時始まった赤い羽根の運動にもよろこんで参加しましたが、希伊子さんは、こうした学校生活の中にいて、同時に、常々開拓者精神を説かれる、信仰篤い河井先生の純粋なお心に触れつつ、一日一日を一生懸命に勉強されました。そうした或る日、それは学年末も近い頃のこと、遠く北海道から母上の重病という電報に、

取るものもとどえず帰宅した希伊子さんはその時を限りに学業を断つたことになるのでした。母上の逝かれたことは希伊子さんにとって、父上と弟妹たちの世話、続いて自らも恵まれない開拓村の小学校の代用教員として社会に立たなければならぬという、思いがけぬ一身上の転機を招くことになりました。爾来、非常な努力のもとに、たびたび講習をうけ、遂に資格を得たこと、重い苦難にも強く耐え抜こうとする意欲、そしてひたすら神への信愛、僻地の子供達の生活と教育問題のありようなど、寄せられる切々とした希伊子さんの音信は、一信ごとに、その内面的な成長および充実過程を如実に示しました。私はそのたびに心痛く遙かに祈りと声援を送らずにはいられませんでした。

こうして河井先生の御精神を心身に被ぶらせていただいた、みごとな希伊子さんに、数年前、久方ぶりの上京を機会に同級生と共に会いましたが、しばらくは手を取り合ったまま言葉もありませんでした。

その後、間もなく希伊子さんは平和学園小学校・川崎市立渡田小学校に転任、時と場所こそ違いますが、相変わらず、児童教育に専念されています。

今回の此の上梓は、序にもございますように、高橋三郎先生の一方ならぬ温かいお心づくしのもとに運ばれましたこと、私は唯々有難く、厚く感謝申しあげるのみでございます。終りに、級友の厚い友情の支えの、どんなに希伊子さんの力になりましたことかを申し上げます。

一九六四年早春

(恵泉女学園教諭)

『わたくし』のこと——序にかえて——

私が北海道へ渡って、夢にも考えなかった生活を始めるきっかけとなったものは、第二次世界大戦であった。私達の年代は、戦争の巨大な魔手にほんろうされ、運命を歪められてしまった人達が殆んどであるから、さも自分独りのような文句も言えないのだけれど、

「もし、戦争がなかったら……」

と、小説の筋でも追うように、自分の上に違った生き方を当てはめて、心を燃やしてみること、しばしばある。

戦争によって、思ってもみなかった道を辿り、今の私が在る事を、はたして良かったのか悪かったのか、決めるべくもないけれど、ともすると、失なったものばかりが心を占めて、歎きと悔いに責められることが多い。何とかして、これまでの生き方からも、自分なりに納得のいく価値を見出だし、自分への安らぎをみつければ、これまでの人生が本当の無駄に終わってしまうと、ひたすら努力しているこの頃ではあるけれど。

昭和二十年九月四日。私にとってその日は、激しい空襲下にも、戦災にあつてさえ離れなかつた東京を去つて、北海道へ向かつた運命の岐路ともいふべき日である。

秋とは名ばかりの太陽が照りつけて、空腹と疲労と終戦の虚脱に衰えきつた身体には、耐え難い日であつた。

いたるところに排泄された汚物と、悪臭に満ちた上野駅頭には、ものうげにうごめき、かがみこんでいる、ぼろ屑のような人間がまき散らされ、その間を縫つて復員兵の大きな荷物が右往左往しながら一種の活気を発し、しつこくからむ浮浪児達が、生命のふてぶてしさを謳つていた頃でもあつた。

昼頃、私達家族、四十才を過ぎた両親と七十八才の祖母、小学三年の妹、五才の妹と歩き始めたばかりの弟と私の七人は、手廻りの小さな荷物を提げただけの姿で、上野駅に集まつていた。終戦の少し前、東京都が都民の疎開と食糧増産の一石二鳥を狙つて、北海道未開地の開拓に人を募つた、拓北農兵団の一員として、出発するためであつた。

牛込の神楽坂近くで、十年やつていた釣道具屋の店が、戦局が苛烈を極めるにつれて開店休業になり、戦時中始めていた、飛行機溶接棒の町工場も戦災で廃業、その上、四月、五月と二度の戦災で、家財のすべてと家作を失つたわが家は、全くの無一物であつた。

そして私は十四才。学徒動員で、三田の保険局に勤めがら、勉強から殆んど切

り離された生活の憂さを、空襲の合い間に東西の文学書を読み漁ることで満たしていた、やせっぽちの少女であった。

各区から集まった、どれも無恰好な荷物を背負い子供づれの、雑多人達に混って長く待たされた後、私達専用に使立てられた列車に乗り込んだのは、もう夕刻であった。汽車が上野駅を出てほどなく、焼土と化した東京の街々に、人の住む灯りがぼんやりついて、たそがれの色濃く迫る車窓から、一つずつ、一つずつ後退していくさまを眺めた時の、哀しみとも歎きともつかない気持を、私は一生忘れない。

「東京を捨てるんだ。死んでも離れまいと決めていた、東京と別れるんだな」

自分に言い聞かせながら涙の溢れるにまかせて、最後の東京の街を喰い入るようにみつめた夜が、ついきのうのような鮮やかさで私の胸にある。祖父の代からの東京は、生まれた時から他の土地に住んだことのない私にとって、かえ難い故郷であった。連日連夜の空襲に死に曝され続けても、空腹を抱え通す食糧難になっても、東京以外に私の住むべき地は考えられなかった。

種々雑多な構成メンバーとの長い旅。貨物船で渡った津軽海峡。汽車旅行の末やっとの思いで降り立った帯広は、啄木の『はば広き街』を偲ばせる、低い屋並のさびれた、街路ばかりがいやにせい然と広い街だった。

そこから明治の遺物然とした、日本甜菜糖株式会社が、甜菜運搬用に引いたという私鉄に乗せられて、広漠とした秋の野面を進んで行くうちに、私は徐々に、言

い知れぬ恐怖のつきあげてくるのを覚えた。単線の狭い軌道の上を、マッチ箱を並べたように激しく揺れながら、そのくせのろろと歩む汽車に二時間余、真暗な広野の真暗な停車場に降ろされて、九月八日というのに震え上るほどの寒さの中を馬車に揺られた後、

「ここがあんた方の家ですよ」

と、初めて堀立小屋の前に降ろされた時、私は怖れていた物の本体と対峙した気持だった。

板壁一枚の崩れかかったわが家には、かがり火のように、太い薪を組んで火が焚かれ、燈火と暖房をかねた赤黒い炎にてらてらと映し出されて、今宵から隣人となる部落の人達が、山賊然と居並んでいたのである。

翌朝、ただ広い、どこまでも広い畠と向き合った時、

「これは、どえらいことになった。こんなところで成長したら、どんな人間になるかわかりやしない。私の人生の目的を貫くためにも、よほど考えてかからなければ。これはうかうかしてはいられないぞ」

と、防風林の落葉松の梢をにらんで、自分にしっかり言いきかせた私だった。

その日から、百姓の経験のない父母が、見習いがてら食糧確保のため、農家に手伝いに出る留守を守って、一才五ヵ月の弟を背負い、炊事・掃除・二百米離れた隣家からの水汲み、近くの林へ行つての薪集めと、全く未経験な、私の意に反する雑事ばかりの毎日が始まると、目をさませば、

「東京に帰してくれ」

と、氣狂いのように頼み続ける私の抵抗が始まった。女子学院の友人たちから、授業再開や疎開地から戻る級友の消息がもたらされると、電燈もラジオも新聞も無く、勉強の「べ」の字も考えられない毎日は、焦りと不安と絶望の中に容赦なく私をたたき込んだ。そんな自分をごま化すために、板壁に目貼りした新聞の切れ端を、台に上っては隅から隅まで読み廻ったり、焼け残りの荷物にただ一冊紛れ込んでいた俳誌『ほととぎす』を、仕事の暇を盗んでは繰り返し読み返したのも、その頃だった。

祖母や幼ない弟妹を抱えた父母の苦労は察しながら、

「でも、このままじゃ、私はめっちゃくちゃになる。どうしてもしたい勉強はあるし、諦めるくらいなら死んだ方がましな望みも。あの人にふさわしい人間に成長しなくては、私の生まれてきたかいがなくなるんだもの」

いても立ってもいられない思いが、目のあいている間は、上京の許しを父母に請い続けさせた。

人に告げる種類の話ではなからうけれど、これまでの日々、挫けそうになる時に、私の内部で一本の芯となり支えてくれたのが、この感情であったから、心の姿として曝そうと思う。終戦間際の殺気立った世相の中で、私は初めて人を愛するようになっていた。死が日常茶飯事の話題となり、恐怖の感情すら鈍っていた生活の中で、女としての気持が素直に育っていたことを、今にして嬉しく思